

## 清音と濁音有気音と無気音の対立から

## 从清浊音对立与有无送气音对立说起

— 中国語と日本語の発音について —

— 浅析汉・日语发音 —

朱 艺 虹(信州短期大学)

Confrontation between a voiceless sound and voiced sound,  
aspirated sound and non-aspirated sound

— About the pronunciation of Chinese and Japanese —

Yihong Zhu (Shinshu Junior College)

**Abstract:** What is emphasized in pronouncing words in Chinese is different from that in Japanese.

Chinese emphasizes the contrast between aspirated sounds and unaspirated ones, while Japanese emphasized the contrast between voiced sounds and unvoiced sounds.

To understand such different and to have a clear grasp of the differences as well as the common features of the pronunciation in both languages are most important in learning Chinese.

**Keywords :** vowel sound, consonant, aspirated sound, non-aspirated sound, voiceless sound, voiced sound

对于初学日语的中国人都有类似的疑问：为什么力行和夕行的读音有时听起来近似于浊音？例如「逆さ(sakasa)」、「私(watashi)」容易听成(sagasa)、(wadashi)而看到汉字又易望字生音。比方说「团体(dandai)」、「短大(tandai)」容易说成(tan tai)、(dandai)。

真是无独有偶，初学中文的日本人在这方面的疑惑竟有惊人的相似。譬如「便宜(pianyi)」、「今天(jintian)」总会不注意地读成(bianyi)、(jindian)。

为什么会这样呢？让我们从两国语言的发音谈起吧。

## I 语音・发音的分类

语音、发音可以根据各种标准进行分类，从发音语言学的观点出发，根据发音方法，可以把语音分为元音和辅音两大类。

## 1 元音

元音是指从肺部发出的气流经过气管振动声带，在

咽喉或口腔不受任何阻碍而呼出口外时，所得到的音。元音有各种各样的音色。均取决于口腔的形状。而口腔的形状是由 1)嘴唇的形状。2)开口度 3)舌头的位置来决定的。

其实各语言的元音都可以用上述三要素来进行描写。

## 2 辅音

辅音是由肺部呼出的气流经过气管和声带，在咽喉、口腔、鼻腔受到阻碍时，所产生的音。在说明辅音时，一般使用发音部位、调音者、发音方法及有声无声(即清浊音)、有气无气(即送气不送气)等术语。发音部位是指辅音在发音过程形成阻碍的地方。即某些在发音时不动的发音器官，如上唇、齿龈、硬腭、软腭等，我们把这些器官称为发音部位。有的发音器官在发音过程中会动。如下唇和舌头。下唇和舌头积极作用于发音部位，是为调音者、发音方法是讲调音者如何作用于发音部位。有声无声是指在发辅音的过程中，是否伴随声带的

振动。有气无气是指在发辅音的过程中是否伴随呼气(这里是指较强的呼气)。根据调音者发音部位、有声无声、有气无气、辅音可以分为四大类。这里只谈谈有声无声和有气无气。

### (1) 有声音、无声音(即清浊音)

发音时, 气流从声门敞开的声带通过, 不振动声带所发出的音为无声音; 气流从微闭的声门通过, 振动声带所发出的音为有声音。无声音又称为清音, 有声音又称为浊音。所有的元音都是有声音的, 辅音中有无声音, 也有有声音。

日语的元音原则上是有声音的, 在词中或词尾时, 和在前面或后面的辅音的关系, 音节的元音不清晰地发出音来, 也就是说因为不发音, 因此可称为元音的无声化, 即发音时声带不振动。日语的辅音主要是有声音和无声音对立。即清音和浊音的对立。如“g—ng—k”, “z—s”, “j—sh”, “d—t”, “dz—ts”, “b—p—h—F—w”。不成对立的浊辅音“n、m、r”清浊音对立是日语的特征。

中文中有声辅音和无声辅音几乎不形成对立, 仅仅只有“r—sh”和“y—x”两对。有声辅音只有鼻音“m、n、ng”边音“l”以及擦音“r”, 其余全是无声辅音。

### (2) 有气无气(即有无送气)

发音时, 被阻塞的气流随着阻塞的解除呼出口外。呼出的气流有强有弱。

伴随较强气流的称为有气音(或称为送气音)。无气音并不是一点儿呼气都没有, 只是与有气音相比相对少些。有无送气的对立是中文的特征。中文中对立的无气辅音和有气辅音如下“b—p”、“d—t”、“g—k”、“j—q”、“zh—ch”、“z—c”。不具有对立面的有气辅音“f、h、x、s”和不具有对立面的无气辅音(均为有声辅音)“m、n、l、r”

日语中有气辅音和无气辅音不成对立, 只有上述的有声和有声无声的对立。但是, 日语中也不是不存在有气无气的现象。当塞音和塞擦音的无声辅音出现在韵头时多伴读有气音, 而在韵头以外的地方多读为无气音。不过一般日本人对于本民族语言中的有气无气并不关心, 一般不予以注意。有气和无气在某些场合有一种表示强调的意思。但在区分意义上基本上不起作用。

从上述对中日语音的浅析, 不难看出中日两国人对本民族语言的发音着重点不同, 也就是中文所强调的送气与不送气的对立, 具体说来, 以“b、p、g”为声母的汉字是不送气的, 即发音时没有强烈的气流冲出; 而以“p、t、k”为声母的汉字是送气的, 即发音时有强烈的气流冲出。我们可以做个小小的实验, 将手掌放在嘴巴前发“bian”和“pian”、“da”和“ta”可以感受到在发“bian,

da”时气流弱而“pian·ta”气流强烈。以汉语为母语的人是不会将它“bian”和“pian”、“da”和“ta”们读成一个音的。而在日语中辅音存在清浊音对立, 对日本人而言, 清音和浊音是两个完全不同的音。是很容易区分的, 而送气与否并不注意, 也就是说很难听出不同。因此“pian”和“bian”、“tian”和“dian”、“ta”和“da”等容易混淆就不难理解了。反之亦然, 现代汉语普通话中, 没有清浊音对立(长期以来, 存在过清浊音对立, 后来才消失的)只强调送气不送气的对立(即有气音与无气音的对立)因此, 往往会难以区分清浊音。就“watashi”、“sakasa”而言, 我们可以从以下两点来谈:

## II 日语的元音和辅音

- 1 日语的元音原则上是有声音的, 在词中或词尾时, 和在前面或后面的辅音的关系, 元音会无声化, 即发音时声带不振动。
- 2 辅音“k”和“t”是清音(即无声音), 也是送气音, 在韵头发送气清音, 在词中, 词尾发不送气清音。即被元音夹住时, 受前面元音的影响, 发音时喉部紧张, 送出的气流就会变得微弱, 即由送气音变成不送气音。并非浊音化。之所以会这样, 是因为不将其变成不送气音的话, 非常不好发音, 因此为了便于发音, 就变成了不送气音, 比方说「貝(kai)」可以发出清音, 可是「赤い(akai)」要想发清音的话, 就必须先发 a 之后停顿一下, 再发(kai)。这样一来, 听起来就像是促音「あつかい」因只能发不送气音。其实, (Watashi)(sakasa)也是这个道理, 为了便于发音, 其中的“t”、“k”都发无气清音, 就像汉语拼音的不送气音“d”、“g”而并不是日语中的浊音「だ(da)」、「が(ga)」。而中国人同样受汉语的影响, 难于辨析这是日语中的不送气清音。误以为是浊音了。

## III 结束语

在学习某种外语或第二种语言时, 人们一般都喜欢用自己母语的体系去套目的语, 特别是对有着共同语言符号——汉字的中国人和日本人来说, 往往会采取轻视的态度, 诚然, 从日语的罗马字和汉语拼音记号来看, 元音和辅音的记号的却很相像。例: 「爱(ai)」、「民(min)」完全一样, 甚至发音也几乎一样。但是, 日语和汉语却是不同的语音体系。要真正掌握汉语, 不能简单地用日语的发音去注音, 而用真正的汉语去读。反之亦然。因此需要真正地了了解汉语和日语发音的不同, 对两种语言

进行比较, 掌握其相同点, 注意其不同点。例如发中文的无气音时, 要注意两点:

- 1 要提高声音, 以减少日语有声音的影响。
- 2 要在形成阻碍处用力。可以采用这样的方法: 把一张纸, 放在嘴的前面, 注意要保证到在发音时, 纸张不动。在发有气音时除了提高声调, 在发音部位用力大外。应注意使用腹部的力量, 用气沉丹田的方法, 尽可能地呼出气流来。而且, 中国语的拼音, 在发音时辅音要同元音一同发出, 不能先发辅音, 再发元音。在发有气音更要注意这一点。例如发(PO)有声时, 不能先发“P”再发“O”, 而要一气将“PO”发出。只有这样才能发好有气音和无气音, 达到学习的目的。当然要学好发音, 还有很多诸如声调等也是很重要的。但不是我们今天要谈的。

## はじめに

日本語を習い始めた中国人は、皆類似の違和感を持っている。カ行とタ行の音は濁音のように聞こえてしまうことである。例えば、「逆さ(sakasa)」や「私(watashi)」などは時々(sagasa)、(wadashi)に聞こえてしまう。また、「団体(dantai)」とか、「短大(tandai)」なども、(tantai)、(dandai)と読むことがよくある。

不思議なことに、中国語を習い始めた日本人も驚くほど似たような違和感を持っている。例えば、「便宜(pianyi)」 「今天(jintian)」を、思わず(bianyi)、(jindian)と読んでしまう。

なぜこういうことが起きるのだろうか。

日中両国の言語の発音についての考察した。

## I 音声・発音の分類

音声、発音は色々な基準で分類できるが、『調音音声学』の立場から調音の仕方によって、次の母音と子音の二つに大別される。

### 1 母音

母音は肺から発せられる呼気が気管を通り、声帯を振動させながら、咽頭や口腔で何の妨害も受けずに抜けていくときにできる音である。母音は色々な音色を持っているが、それは、口腔の形によって決められる。そして、口

腔の形は1)唇の形、2)口の開き方、3)舌の位置によって形成される。各言語の母音は上記の三つの要素で表記される。

### 2 子音

子音は肺から発せられる呼気が気管を通り、声帯を抜け、咽頭や口腔、鼻腔で妨害を受けた時にできる音である。子音を説明するにあたって、普通、調音点、共鳴器官、調音法及び有声無声、有気無気などの用語が用いられる。子音が発音過程でどこで妨害を受けるかによって、その場所が調音点となり、発音器官の中で調音に際して動かない上唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋等に対して、発音器官の中で調音に際して動くものに、下唇、舌がある。下唇、舌は調音点に積極的に働きかけるので、共鳴器官となる。調音点に対して、調音法とは共鳴器官がどのように調音点に働きかけていくかということである。有声無声とは子音を発音する過程で声帯の振動を伴っているかどうかの区別であり、有気無気というのは子音を発音する過程で氣息を伴うかどうか(ここでは強い呼気を伴うかどうか)を指す。共鳴器官、調音点、有気無気、有声無声によって、子音は四つに分類できる。ここでは、有気無気と有声無声について簡単に説明する。

(1) 有声音、無声音(即ち清音濁音)の中国語と日本語における対比

発音の時、氣息は声門を開いた状態のまま声帯を通り抜ける際、声帯が振動しない音は無声音といい、氣息がわずかに閉じた声門を通り抜ける際、声帯を振動させる音は有声音という。無声音は清音ともいい、有声音は濁音とも言う。母音はすべて有声音である。子音には、有声音と無声音とがある。

母音は原則として有声音であるが、単語の中や終わりに来る時に、前後にある子音との関係で、音節の母音をはっきり発音しないことがある。つまり声を発しないので、これを母音の無声化という。無声化されると発音する際の声帯の振動がなくなる。日本語の子音は主に有声音と無声音との対立である。(即ち清音と濁音の対立)

“g—ng—k”、“z—s”、“j—sh”、“d—t”、“dz—ts”、“b—p—h—f—w”。対立しない濁音は“n、m、r”のみで、清音と濁音の対立は日本語の特徴である。中国語の清音と濁音はほとんど対立しない。僅かに“r—sh”と“y—x”が対立するのみである。

濁音は鼻音の“m,n,ng”、側音(舌の両側から氣息を出す音)“l”及び摩擦音“r”しかない。ほかはすべて清音である。

## (2) 有気音、無気音の中国語と日本語における対比

発音する時、塞がれた氣息は妨害がなくなるのに伴い、口から発せられる。吐き出す氣息は強かったり、弱かったりする。強い息を伴うのが有気音であり、弱い息を伴うのが無気音である。無気音は少しも息を出さないわけではないが、ただ有気音と比べると、息が弱い。有気音と無気音が対立するのが中国語の特徴であり、中国語において対立する有気子音と無気子音は次の通りである。“b—p”、“d—t”、“g—k”、“j—q”、“zh—ch”、“z—c”。対立しない有気音は“f, h, x, s”であり、対立しない無気音(有声子音)は“m, n, l, r”である。

日本語では、有気音と無気音が対立しないので、上述のように有声と無声の対立しかない。しかし、日本語の中にも、有気と無気の対立現象がないわけではない。破裂音と破擦音の無声子音は単語の頭とそれ以外に現われたときを比較すると、前者の場合は氣息が強い。後者の場合は普通は氣息が弱い、ネイティブ・スピーカーは発音の有気と無気には関心がない。有気無気によって強調を示す場合もあるが、意味の区別上は役に立たない。

上述のように、中国人と日本人は母語の発音に対して重点を置くところが異なる。中国語は有気無気の対立を強調しているが、具体的に言うと、“b, p, g”の子音を持つ漢字は無気音で、発音する時氣息が弱い、“p, t, k”の子音を持つ漢字は有気音で、発音する時氣息が強い。実際に体験してみよう。(bian)と(pian)、(da)と(ta)を発音する時、手のひらを口に当ててみると、(bian)、(da)を発音する時に氣息が弱いと感じ、(pian)、(ta)を発音する時には氣息が強いと感じるはずである。中国語が母語である人は、このような対立する音を同じ音には読まない。日本人は、清音と濁音は完全に別の音であると弁別しているが、氣息が強いかどうかはほとんど気にしていないので、弁別が難しい。したがって、(pian)と(bian)、(tian)と(dian)、(ta)と(da)などを混同しやすいのは分らないことではない。反対に、現代中国語では、有声と無声が対立しない(昔は有声と無声が対立することがあったが、後に消えたと考えられている)。今では有気と無気の対立しか強調しない。有気と無気の対立即ち有気音と無気音の対立である。このように、清音と濁音の弁別がしにくくなる。

次に(watashi)、(sakasa)を例として挙げ、次の二点について述べる。

## II 日本語の母音・子音

### 1 日本語の母音は、原則として有声音であるが、語中や、

語尾などにあるとき、前後の子音との関係で母音が無声化する。つまり、発音の際に声帯が振動しない。

2 子音“k”と“t”は清音、即ち無声音でもあり、有気音でもある。単語の頭にあるときは、有気清音として発音されるが、語中や、語尾などにあるときは、無気清音として発音される。即ち母音に挟まれたとき、前の母音の影響で、発音の際に喉が緊張するため、出した氣息は弱くなる。つまり、有気音から無気音に変わるのである。例えば、「貝(kai)」を清音として発音することができるが、「赤い」を(akai)と発音する際に、“k”を有気音で発音しようとするれば、1度“a”で止めてから“kai”を発音しなければならない。

そうすると、「あかい」よりもむしろ「あつかい」のように聞こえるはずである。“Watashi”“sakasa”も同様である。発音しやすいように、単語の中の t と k を無気清音化して発音するのである。中国語のピンインにおける無気音“d”、“g”のようで、日本語の濁音「だ(da)」、「が(ga)」ではない。しかし中国人も母語の影響で、日本語の無気清音と濁音の弁別できなくて、濁音だと思ってしまっているのである。

## III おわりに

外国語や、第二言語を学習する際に、多くの人が母語の体系を対象言語に当てはめようとしがちである。特に、共通の言語記号である漢字を共有する中国人と日本人は、対象言語の習得を軽視しがちである。確かに日本語のローマ字と中国語のピンインを見ると、母音と子音の記号はよく似ている。例えば、「愛(ai)」、「民(min)」などのローマ字表記は完全同様で、発音も殆ど同じである。日本語と中国語には、実は大きな相違がある。

中国語をマスターするためには、安易に日本語で表記してはならない。本来の中国語のピンインで読むことが大切である。日本語においても同様である。だから、両言語の発音の違いを知り、両言語の対照を通じて、その違いに注意し、その共通点を把握することが重要である。

中国語の無気音を発音する際は、二つの点に注意することが必要である。

- (1) 声を高くして日本語の有声音の影響を減らすこと。
- (2) 調音器官を閉鎖する際には力を入れること。

有効な方法として、一枚の紙を口に当てて、発音する際、紙が動かないように注意して訓練するとよい。有気音を発音する際は、上記1,2以外には、腹筋を使って、気を丹田に込めるつもりで、なるべく強い息を出すよう



[注]

にしなければならない。そして中国語のピンインは、発音する際、子音と母音を同時に発する。先に子音を発して、あとで母音を発するのは良くない。有気音を発する際は、特に注意すべきだ。例えば、po を発音する際、まず“p”を発してから、次に“o”を発すると正しい発音にならないので、必ず、一気に“po”を発音する。

このようにすれば、有気音と無気音を上手に発音することができると思う。

(投稿 2008 年 11 月 4 日, 受理 2008 年 12 月 9 日)

- 1) 续三义 编《対日漢語語音教程》北京语言文化大学出版社 2000 年
- 2) 《新编日语》第 1 册 上海外语教育出版社 2000 年版
- 3) 川和 孝著「日本語の発声のレッスン」新水社 2005 年
- 4) よくわかる「音声」松崎 寛 河野 俊之